

この授業は、ピアノの演奏技術と表現力を高めるためには不可欠なロマン派の作品を取りあげ、楽譜を理解し表現するためにピアノ奏法を学ぶことを目的としている。到達目標はシューベルト、ショパン、リスト、シューマン、ブラームス等の作品を豊かな表現力で演奏できるようになることである。

受講生は2回生5名である。受講生全員ピアノ①～②を受講済みである。前学期ピアノ②においてはロマン派のピアノ練習曲を中心に授業を受けている。

授業で取りあげた作品は以下の通りである。

| | |
|----------|-----------|
| シューベルト作曲 | ソナタ 作品42 |
| ショパン作曲 | バラード第1番 |
| バラード第2番 | |
| バラード第3番 | |
| | ワルツ作品34-1 |
| | ワルツ作品34-3 |
| ブラームス作曲 | ソナタ第2番 |
| | 間奏曲作品118 |
| シューマン作曲 | 蝶々 |
| 幻想小曲集より | |
| 飛翔 | |

それぞれの曲は受講生と話し合い、意欲的に研究が進むように、出来る限り希望に添うようにした。

受講生は5名であるが、手の大きさや腕の長さに、かなりの差がある。広く(10度)手が広がる者2名、平均的な大きさの者2名、小さい者1名である。それぞれの大きさに合わせた奏法を工夫する必要がある。第1に必要なことは、各自の手の大きさと機能を把握することである。第2には無理をしてはならないということを実感することである。受講生のほとんどは、無理をして演奏することに慣れており、自覚をしていない者が多い。無理をする(極度に指を拡げ、腕を緊張させる)奏法では、

安定した音色作りが困難になる。

ロマン派の作品は、特に感情表現の変化やアンサンブルとしてのピアノ奏法に多彩な音色が必要とされるため、タッチやペダリングに関する繊細な感覚と音色のブレンドに対応する技術の習得が不可欠である。ピアノの奏法が確立し多くの作品の宝庫であるロマン派の作品を取りあげることにより、具体的なタッチやペダリングを学ぶ成果は大きいと思われる。さらに、学生自身が個性を自覚し、自発的な演奏を目指すためにも非常に有効である。

運指はピアノの奏法の基礎となるものである。手の大きさに対応した運指は、パッセージのポジション分けから行う必要があるため、譜読み時の指使い決めの際には細心の注意を払った。ペダル使用の目的を明らかにして、無駄で無意味な使用を避け、必要十分なペダリングを選択し、合理的な使い方を検討した。様々な出版社の楽譜が入手可能であるが、主に原典版を授業では使用している。指使いはいずれにおいても参考程度に留め、鵜呑みすることの非合理生を授業の中で常に指導した。受講生各自の手指のサイズ・技術に最も相応しい指使いを検討することはピアノ奏法指導の基本であると考えた。

ポジションの移動という捉え方は、ほとんどの受講生にとっては、大学入学時までに経験のない方法なため、無理な奏法を重ねる癖から解放されていない受講生が多い。頑張ること・無理をすることの両方はピアノを演奏することの妨げにしかならないということを受講生は段々と理解して来ているように思われる。

脱力に関しては、奏法の基本的なテクニックであるが、緊張と弛緩の兼ね合いに対して、受講生は未だ問題を抱えている状況である。各々の問題点を自覚しており、更に解決のために具体的な解決方法を研究しなくてはならない。ロマン派のピアノ作品は感情に直接結び付いた曲が多いため、曲を理解することと表現することを冷静に区別した奏法が求めら

れるが、感情が身体に移った状態になることで演奏が困難になることが受講生には多く見受けられる。感性豊かなことと合理的な奏法の調和を次期ピアノ④の課題の一つとして取りあげたいと思う。

ピアノ③授業の終了に際して、アンケート調査を行った。質問事項は主に6項目である。

先ず第1に、自由な感想

- ・受講生が自ら選択した曲であるため楽しく勉強することが出来た
 - ・ロマン派の難しさを実感した等、十分な手応えを感じている。受講生1名はロマン派の作品を演奏するコンクールに出場し入賞した。
- 第2に、ロマン派について学んだこと
- ・多彩な音色が求められること
 - ・メカニックと表現力の両方の必要性
 - ・幅広い表現

等、具体的な音色やテクニックの必要性を学んでいる。先ずは気づくことから始まる。実現することは簡単なことではないが最良の支援の方法を考えたい。

第3に、ロマン派について学びきれなかったこと

- ・様々な作曲家の作品を演奏出来なかったこと
 - ・テクニック(メカニック)の訓練
- 音楽や美術に触れること等、15回の授業の中でピアノ以外の芸術について触れること、さらに、他の受講生の聴講ではなく実際の演奏で具体的に学ぶことの重要性に注目したい。今後の課題として、曲目の選択等に教訓として生かしたいと思う。

第4に、ピアノのテクニックについて学んだこと

- ・テクニックと気持ちを分けて演奏し、身体の使い方を注意する
- ・速いパッセージを無理に指を拡げて動かすのではなく、身体全体を使って弾くということ

等、授業の目的である表現力の獲得に必要な身体の合理的な使い方に対する理解が深まっていることを示している。

第5に、テクニックに関する今後の課題

- ・速いパッセージの演奏
- ・P～Fの音をきれいに鳴らす
- ・様々な音色の演奏
- ・音色の変化
- ・Pの音色の安定
- ・身体が楽な状態での演奏

等、ポジション移動の問題や多様なタッチの具体化に対する課題が多く残っている現状を表す回答になっている。ピアノ演奏表現は終わりのない行為ではあるが、奏法を獲得するためには合理的な方法を若い間に学ぶ必要がある。続くピアノ④の授業において更に徹底した指導を心がけたい。

第6に、授業への要望

- ・自分の課題を達成するために必要な曲のアドバイス
 - ・特になし
- 等、授業で取りあげきれなかった曲に対してのアドバイスを今後、何らかの形で伝えたいと思う。次年度に向けての改善点としては、可能な限り多くの作曲家、作品を受講生が学ぶために、曲の規模を考慮すること。同一の課題曲を課して、受講生それぞれの、身体と感性の個性を学ぶ機会を授業に組み入れること。この2点としたい。